

# 発達障害に関する描画研究の概観

## ー風景構成法に焦点をあててー

文山 知紗

### 1. はじめに

文部科学省 (2012) によると、小・中学校の通常学級において教師が発達障害の特徴を有すると考える児童・生徒の人数は、推定値 6.5%とされている。近年「大人の発達障害」(備瀬, 2009; 河合・田中, 2013 など) という言葉の使用や、発達障害の児童・生徒に対する個別支援の必要性の訴えが多く見られるなど、「発達障害」という言葉は世間に浸透し、理解もされつつある。しかし、発達障害をもつ者の独特の世界観については未知な部分も多い。その未知な部分の探求を目的として、臨床現場においては発達障害のアセスメントに際し、AQ (Autism-Spectrum Quotient) や PARS-TR (Parent-interview ASD Rating Scale-Text Revision), ADHD-RS (ADHD Rating Scale) などの質問紙での評価や、WISC-IVなどの知能検査、さらに Good-enough 人物画やロールシャッハ・テストなどの投影法、といった様々な手法が用いられている。その中でも Good-enough 人物画やバウムテストなどの描画法は、子どもから大人まで比較的簡便に用いることができるアセスメントツールであると言える (池田, 1995)。数多くある描画法のうち、風景構成法 (The Landscape Montage Technique) は、クライアント理解のためにも、治療のプロセスの確認のためにも、またそれ自体が治療としても使われることもある。

発達障害のアセスメントでは、たとえば WISC-IVにおいて「VCI が高く、PSI が低い」と言ったような視点や、ロールシャッハ・テストにおいて、「独特なプロットの切り取り方 (dr) をする」といった発達障害に特徴的な理解の観点があるが、現段階において風景構成法では特有の観点は見出しにくい。というのも、風景構成法は他のアセスメントツールと比較しても描画の個性が高いので、特徴的な視点というものを描き出すことが難しいためだと考えられる。特に風景構成法においては、描画全体を概観する視点が重要になってくるために、指標を中心とした数量研究も少なく、さらに発達障害に特化した検討は貴重である。そこで本稿では、発達障害に焦点を当てた風景構成法についての研究を、数量研究から質的研究まで概観・整理し、今後の実践と研究に寄与したい。

### 2. 発達障害とは

そもそも発達障害とはどのような概念なのだろうか。まずは「発達障害」という概念について整理し、その特徴や変遷などをまとめるところからはじめたい。

DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013) において発達障害は「神経発達症候群/神経

発達障害群」として分類されており、「発達期に発症する一群の疾患」とされている。その中に含まれるものは、「知的能力障害群、コミュニケーション症群／コミュニケーション障害群」、「自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害」、「注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害」、「神経発達運動症群」、「限局性学習症／限局性学習障害」である。またそれらは他の疾患と併発するとされている。

「神経発達症候群」の中でも特に最近「発達障害」としてよく取り上げられるのが自閉スペクトラム症であり、自閉スペクトラム症とは、基準 A「複数の状況で社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」と基準 B「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」が基準 C「症状が発達早期に存在」(American Psychiatric Association, 2013)するとされている。自閉スペクトラム症は、Kanner (1943) が早期小児自閉症として 11 人の共通する特徴を持った児童について報告し、Asperger (1944, 富田訳, 1996) が自閉性精神病質として小児 4 事例を取り上げ、それがその後アスペルガー症候群という言語障害が軽症な群として発展していったことが、自閉症というひとつの概念の始まりであるとされている。その後 Wing (1996, 久保訳, 1998) は、自閉症にはさまざまなバリエーションがあるが、同じ本質の変化であり、連続して変化していく一つのものとして捉えられるところから「自閉症スペクトラム」という概念を提唱した。また、自閉症の基本的な障害を①社会性の障害、②コミュニケーションの障害、③想像力の障害の 3 つにまとめた。これらの特徴は現代の「発達障害」の典型的な理解の根幹になっている。

小野ら (2010) によると、自閉スペクトラム症は当初、言語障害が病態の中心と言われていたが、1980 年代後半からは社会性の障害であるという考え方にシフトしていったとされている。自閉スペクトラム症を社会性の障害とふまえたうえで、発達障害の研究を長年続けている河合 (2010) や河合・田中 (2013) は発達障害の中核的問題として「主体のなさ」や「主体の欠如」を提唱している。河合 (2010) は自身の臨床経験やその観察から、発達障害の子どもが自分のことを「私」と言わずに、自分の名前で「A ちゃん」と呼ぶことを取り上げて、発達障害の主体のなさについて考察している。そこでは、主体の成立には、自分を他のものとの並立として具体的に存在する「A ちゃん」を否定する必要がある、それができることによって誰もが言える、実体のないものとしての「私」という視点が確立されると河合 (2010) は述べている。つまり、主体は実体のないものであると言及している。また河合 (2010) においては、主体は客体との関係にあるように、「常に他者との関係で成立する」もので、それが自他の区別と関わってくるとされる。さらに主体と言語との密接な関係性について述べ、鏡像段階を経ることで主体と言語が成立し、自己関係・自他関係の成立があって、そのうえで、「自分と自分、自分と他者の差異」が生じてくることに言及している。

上記の理論から河合 (2010) や河合・田中 (2013) は、発達障害は主体がないからこそ、言語が成立してこず、また主体がないから他者との関係が成立せず、他者の気持ちを理解することも困難であり、自他の区別ができないことで自他の境界が曖昧になってくると述べている。発達障害の特徴と言われるこだわりは「何か決まった物や、何か決まった行動が主体の代わり」であり、「定点を作り出す」ものになっているため、そのこだわりを奪われるとパニックを起こすのは、「定点をなくす」ためだと考えられている (河合, 2010)。また、発達障害児に見られ

るクレーン現象についても「境界のなさ」から説明できると述べられている。というのも、クレーン現象とは、他者の身体をまるで自分の物かのようにみなして操作することであり、身体という目に見える形における区別、境界が成立していないと言えるからである。

なお、本稿における発達障害とは、DSM-5の診断基準における自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習症など様々な状態像を指し示すこととする。DSM-5の診断基準において、併存診断が可能であることから明らかなように、それらは重なりあっている可能性が高いため、本稿においては上記のような広義の意味として用いることとする。

### 3. 風景構成法とは

風景構成法とは、中井久夫によって考案された描画法のひとつであり、もともとは統合失調症患者に対して描画を通しての治療的接近の可能性を追求するため、また箱庭療法への適用性を見るために開発されたものである。検査者やセラピストが10個のアイテムを順番に提示していき、クライアントはそれらのアイテムを、枠が描かれたケント紙に1つずつ描いていく。1つのアイテムをクライアントが描き終わるのを待って、次のアイテムの提示を行う。皆藤(1994)によると、風景構成法は「空間体験の様相(いかに生きているか)を確認すること」であり、先の項でも触れたようにクライアントを理解するアセスメントのためであったり、それ自体が治療にも使われたりする。さらに鍛冶(2011)によると、風景構成法には3つのポイントがあると述べている。1つめが「制限の中で描くと、失敗し、ごまかすこともできず、それに向き合わざるを得なくなる」ということ、2つめが「空間を形成する主体としてのあり方も同時に問われる」ということ、3つめが「風景構成法に含まれる、切断したり、切断をつないだり」ということだと言及されている。1つめおよび、2つめは、制限され、その中で失敗することで、「新しいやり方を生み出す」ことになり、その方略をいかにして選び取るのかということを見ることができるといふ。また3つめに関しては、切断やつなぐということとは、「他者との間に境界をつくり、他者とつながりを持ち、自分が生きることができ空間を生み出していく」とことと重なり、それが「生きていくうえでどのような世界を体験しているのか」ということと深く関係するとも言われている。上記の点から、社会性や主体に問題を抱える発達障害と言われる人々の風景構成法を見ていくことは、周囲の人々の中でいかに自分の空間をつくり、定位させ、生きていくかを見ることができると考えられ、それは発達障害児・者の世界観を理解するために有用であると思われる。

では、風景構成法を見ていくための視点としてはどのようなものがあるのだろうか。風景構成法に関する研究手法はその全体の構成を見るもの、アイテムごとに見ていくもの、彩色に重きを置くものなど多様であり、その対象も幼児から高齢者まで幅広い。また非臨床群を対象にしたもの、統合失調症やうつ病、発達障害などの臨床群を対象にしたものなど様々である。

描画を全体として見る方法としては、高石(1996)が自我発達との関連から「構成型」の概念を導入した(表1)。高石(1996)は、幼児期の自我の芽生えに続く、自我発達上の第二の質的転換期である『自我の対象的把握が可能になる』のはいつ頃かということを探るために、言語的アプローチとともに風景構成法を併用した。風景構成法において、「視点のあり方」つまり、自分をどのように捉えているか、についての発達の变化を見ることができるといふため、自我発達の

大まかな度合いを見ることができると考えられた。その中で全体の構成のパターンを見ていくものとしての構成型が生まれた。構成型とは、①大景群の統合度、②視点の定位度、③遠近の有無、④立体的表現の有無という4つの基準を元に作成されているもので、7つの型に分類されている。構成型においては、小学校3～5年生で視点の質的転換が起こるとされており、視点をどこに置いて構成するのかについては「各人の心理的諸要素を統合する主体としての『自我』のあり方」に影響を及ぼしていると高石(1996)は言及している。

また皆藤(1991)は、「風景の中の自己位置」という概念を提唱し、自分を絵の中のどこに配置するかということを見るもので、描画後のやり取りにおいて自己位置を聞くことは、「描き手が風景という自らの内的世界と対峙しながら、自らを定位したいと感じる位置を決定していく心的プロセスを必要とする質問」であり、その位置は「現出した内的世界における描き手の現時点での内的状況を焦点づけること」になるかもしれないと述べている。

表1 構成型分類基準(高石,1996より転載)

I. 羅列型	全要素ばらばらで、全く構成を欠く。
II. 部分的結合型	大景要素同士はばらばらだが、大景要素と他の要素(中景・小景)とが、一部結びつけられている。基底線の導入が認められることもある。
III. 平面的部分的統合型	大景要素と他の要素の結びつきに加えて、大景要素同士の構成が行われている。しかし、それは部分的な統合にとどまり、「空とぶ川」「空とぶ道」などの表現が見られる。彩色されていない空間が多く残り、宙に浮いた感じが特徴的である。視点は不定で、複数の基底線が使用されている。遠近・立体的表現はない。
IV. 平面的統合型	視点は不定多数だが、視向はおおむね正面の一方に定まり、全ての要素が一応のまとまりをもって統合されている。しかし、遠近・立体的表現は見られず、全体として平面的で貼りついたような感じが特徴的である。奥行は上下関係として表現されている。
V. 立体的部分的統合型	視向が正面と真上(あるいは斜め上方)の2点に分かれ、部分的に遠近法を取り入れた立体的表現が見られる。しかし、大景要素間でも立体的表現と平面的表現が混在し、全体としてまとまりを欠く分裂した構成になっている。「空からの川」など画用紙を上下に貫く川の表現が特徴的であり、その川によって分断された左右の世界が、二つの別々の視点から統合されていたりする。鳥瞰図や展開図的表現が見られることもある。
VI. 立体的統合型	視点・視向とも、斜め上方あるいは正面の1点におおむね定まり、全体が遠近・立体感のあるまとまった構成になっている。しかし、「平面的な田」「傾いた家」など一部に統合しきれない要素を残している。
VII. 完全統合型	一つの視点から、全体が遠近感を持って、立体的に統合されている。

さらに弘田(1986)は各課題アイテムの描画特徴について発達指標となる分析項目を作成しており、松井ら(2012)は彩色指標を作成・評定している。彩色過程について中井(1996)は「混沌を最終的に追放する機会である」と述べており、松井(2009)は「つながりや連続」ととらえて考察している。さらにその「つながり」と密接に関連するのが「情動づけ」(中井,1996)であるとも述べられ、彩色過程は情動を描画に付与するプロセスであると考えられる。

次項では、上記のような風景構成法の視点をふまえたうえで、発達障害をテーマにしている研究を数量研究と質的研究に分けて概観し、風景構成法において発達障害はどのように捉えられるかについて見ていくこととする。

#### 4. 風景構成法と発達障害

発達障害と風景構成法についての研究は、これまでに数としては非常に少ないが、存在するものの中では、主に数量研究と質的研究に分けることができる。佐々木 (2012) によると、数量研究とは「研究した事象を数量化し統計的な手法を用いて行う研究」であり、質的研究とは「データの数量化を前提としない研究」と言われている。上記の定義を参考にすると、風景構成法と発達障害に関しての数量研究としては、統計的な手法を用いていないという点では厳密ではないものの数量化している点では、内田ら (2014) と長野 (2013) が代表的な研究として挙げられる。

内田ら (2014) は、自閉スペクトラム症と診断されている児童期・青年期男子 49 名 (平均年齢 13.45 歳,  $SD = 3.97$  歳) を対象 (以下、内田ら (2014) に倣い ASD 群とする) に風景構成法を実施し、高石 (1996) の構成型分類基準を用いて構成型の分布の特徴を検討した。また青年期群 35 名との比較も行った。ASD 群の特徴としては完成型であるⅦ型に該当するものは皆無であり、Ⅰ型に関しては各年齢群問わず 10~27.8%が該当し、さらにⅠ~Ⅲ型の中に ASD 群の大部分 (77.5%) が含まれていた。ASD 群の特徴として「アイテムの不統合」を挙げ、平面上でアイテムを統合することの難しさが示された。また青年期群同士の比較では、青年期 ASD 群は青年期定型発達群と比べて「3次元—不統合」が有意に多い結果となり、ASD 群の中でも青年期に入ると、奥行き感を獲得する青年が増加することを示唆している。

長野 (2013) は、自身が担当した事例のうち、軽度発達障害もしくはその傾向があると診断された 40 事例 (平均年齢 28.6 歳) を対象に、心理面接および心理アセスメント面接において個別で実施した風景構成法について考察している。構成型分類基準 (高石, 1996) による比較では、発達障害群ではⅠ型からⅣ型までが 77.5%, Ⅴ型からⅦ型までが 22.5%であったのに対し、大学生群は前者が 1.3%, 後者が 98.7%と対照的な結果になっており、発達障害群はより羅列的で平面的であるという特徴を持つことが明らかになった。またこの結果は、学年別構成型の小学校 2 年生群に相当すると結論づけられている。さらに個別の事例について、継時的変化と個別の特徴についても見ており、①そのとき教示されて描いているものに自分になってしまうこと、②自分の内界からではなくどこか他のところにあるものを模倣するなど、自他の別が漠とした自己意識の在り方になっていること、③『軸の引っ張られ感』があること、④象徴性がないことなどについて論じている。ここでいう『軸の引っ張られ感』とは、「直前に描いた項目を基底線にして、それに引っ張られるように軸がゆがんで次の項目が描かれる」と定義されており、これは「風景を構成するはずの水平軸と垂直軸が未成立である」のではないかと、長野 (2013) は考察している。

次に質的研究についてまとめていくこととする。質的研究については、近年発刊された「発達障害」についての著作に加えて、主に心理臨床学研究と箱庭療法学研究を第 1 号から網羅的に探索し、「発達障害」や「発達障害特性」を持つクライアントに対して行われたセラピーのプ

ロセスの中で、風景構成法を使用しているものを取り上げることにした。

まず守屋 (2009) は、スクールカウンセラーにおける複数の発達障害児に対する風景構成法の事例を報告した。身体的訴えの多い別室登校の ADHD 男子の風景構成法には、大景群を大胆に、また思いつきで描く姿に「見通しの立てられなさ」を感じたと述べており、さらに「上部真ん中右から下へと流れる大きな川は衝動性の高さのようにも見える」と言及している。中景群以降は具体的なイメージがわきにくくなり、萎縮したように小さくしか描けなかったとも説明されている。またキレた時の行動がこわいと言われたアスペルガー障害の男子は、アイテムは画一的な描き方になっており、風景として構成されている感じはしないものの、動きのある人が描けている点は、部分的なつながりが見られ、ある程度の対人関係をもつこともできている日常の様子が示されているという考察がなされている。また独自のストーリーが展開されていく様子も描写されており、その点もこのクライアントらしさであると守屋は述べている。

また石原 (2009) は、広汎性発達障害が疑われる大学生の風景構成法に関して、「遠近表現がまったくなく、他者の視点に立つことが難しいと想像された」と述べており、内田ら (2014) で述べられていたことと同様、遠近感のなさという点が事例研究でも指摘された。

石金 (2013) は大学生の発達障害者 3 名に風景構成法を実施している。描かれた作品の共通の問題として「大景群レベルでの構成の崩れは小さく、アイテム間のつながりの問題」を述べている。知的能力が高く、大学というコミュニティに属するという共通点を持つ 3 事例は、「クローズアップして見ると『変』さが露呈しやすいものの、準拠枠があればそれなりの適応ができる可能性もある」という結論に至っており、発達障害者にとっての「枠」の重要性についても言及している。この場合の準拠枠とは「風景構成法」でいう「枠」や「決まったアイテム」のことであり、日常においては明確な指示などがそれに値するだろう。さらに石金 (2013) は、「発達障害特性を持つ事例の表現は一般的に象徴性を持たず、心的内容が表現されたものとしては読み取りにくい」と述べながらも、「言葉で表現するのが難しい、発達障害を持つクライアントの世界との関わり方を理解する手がかりが、箱庭や描画の表現様式の中には存在している」とも述べており、イメージの媒体となる箱庭や描画を行う意義についても考察している。

「枠」の重要性については、杉山 (2016) も述べており、高機能自閉症の 5 歳女兒との 7 年間の継続的な面接の中での風景構成法と箱庭療法における表現の変化について論じている。「描けない」状態から始まった風景構成法が、「枠」があることで描けるようになり、「これまで A が住んでいた『広大』な世界と、A がこれから歩んで行く現実世界が結合し、新たな次元の世界が作り出されたのではないか」と考察されている。さらに継続的な面接における風景構成法の変化については、南野 (2007) や村上 (2011)、神谷 (2011)、前川 (2017) も論を発表している。

南野 (2007) は、ADHD を抱える中学 3 年生男子に対して、自我の様子を知る手掛かりとして、また体験の総体をどう構成していくかについて理解する一助として風景構成法を用いている。それは ADHD という障害が、体験の再構成に弱さをもち、自分を空間的、時間的に今あるところに定位させることの弱さと関連しているからであると考察している。与えられる新しい項目をすでにある風景全体に位置づけていく過程から、次々に起こる新しい体験をすでにある心のなかの体験の総体に取り込み、刻々と体験が塗り替えられていく過程を見ることが出来る

と南野 (2007) は述べている。この事例では#1 では、彩色に対するこだわりを見せるが、川、山には遠近感があり、平面的統合を抜けている段階だと示されている。しかし「細部に見せるこだわりと、余白の多いさびしげな全体とのギャップに、部分的には豊かでありながら、それらを発展させ、まとめ上げる様式が育ち足りない内的体験の質が表れているように感じた」と記載されており、また家の窓や扉のなさからも、クライアントの閉じている状態について推測している。しかし#10 には、場面ごとの統合がなされ、立体的部分統合型へと昇華する。「動き」も出てきて、活発な印象の風景構成法へと変化してきたことに加え、さらに「道」がつながっていく様子にも言及している。セラピストである南野によって、「クライアントのなかのぼらぼらに浮遊している体験が結びつ」いたと解釈がなされていた。

村上 (2011) は小学 5 年生の発達障害児に対して投影描画法を継続的に実施している。その中でも風景構成法については、1 回目では全要素がばらばらで、構成を欠く羅列型の段階にあり、川によって世界が二分されていると述べている。二分された世界は、「家 (友人の家) や田 (社会化された部分) と自分とを分けているよう」だと言及しており、また道が何処にもつながっていない点にも注目している。しかし 2 回目には、部分的結合型へと昇華する様子を見せ、3 回目には視向が正面の一方に定まり、全ての要素が一応のまとまりを持って統合されているとしている。しかし遠近や立体的な表現は見られず、全体として平面的である平面的統合型であるとし、社会とつながりをもてない感じだと考察している。ただし余白が多く寂しい印象は受けるが、自動車や川を上る鮭が描かれ、「動き出した感じ」とも述べており、他の事例にも述べられているような「動き」の出現がここにも表れていると考えられた。

神谷 (2011) は発達障害的な様相を示す中学 1 年生男子に風景構成法を実施している。初期に施行した風景構成法については、「周囲の余白を多く残している」点に注目して、「身を縮こまらせて日々を過ごしているよう」だと、本人の日常の様子と重なる部分があると言及している。#22 になると、用紙の全体を使った表現がなされるようになり、表現される空間の広がりについて指摘している。また#36 では、用紙の全面を使った表現かつ躍動感のようなものを神谷は感じており、上記で述べた論と同じように継続的な面接の中で「動き」というものが表現されやすいことが示されている。さらに#64 では、「棒人間が人になり、奥行きが明確になり、道が山へと向かい始め」、#92 では道が縦方向になって、山に向かって一直線へと向かう様子が表現されている。南野 (2007) も「道」に注目していたが、「道」の動きを見ていくことが発達障害の内的な流れや表現について理解する手掛かりになるのかもしれない。

前川 (2017) は自閉症スペクトラム障害特性がある 30 代女性について事例の流れをまとめている。風景構成法①では水平の川で上下が分断され、上下で異なる空間が接していると論じている。風景構成法②でも水平の川が描かれ、どちらも構成面の問題を表していると指摘しているが、風景構成法③では、川が斜めになって、空白が面を構成するようになり、「田と道は黒いが、稲のような物が書かれ、人は靴を履いている」。風景構成法④は広がりのある空間が現れ、風景構成法⑤では三叉路ができ、人が道の上に立つようになっている。また家の後ろに重なるように山ができ、「初めて重なる形で奥行きが表現」されたと述べられている。

このように、上記の先行研究をまとめると、発達障害児・者の描く風景構成法は羅列的で平面的なものが多い可能性があり、アイテム間のつながりや統合に問題があるように考えられる。

しかし事例の個別性が強いことも影響して、セラピストである各著者の主観的な解釈によっていると考えられた。よって次項では、河合 (2010) や河合・田中 (2013) が発達障害の特徴として言及した「主体・定点のなさ」やその弱さという観点から、先行研究を再検討していくこととする。

## 5. 発達障害と風景構成法研究の新たな視座

石金 (2013) と杉山 (2016) は「枠」の重要性について述べていた。つまり、「枠」があることで、描画が展開していく様子が見受けられた。「枠」とは外部や他者から与えられる一種の基準であり、そのような準拠するものがある場合には適応や発展が可能であるが、準拠するものがない場合、もしくはそれが明確ではない場合においては、その「枠」を自ら作り出すことは難しいということの意味していると考えられる。このことは、他者から受動的に与えられるものについては対応できるものの、自ら主体的に選び、そのうえで行動することの困難さを示していると言えるだろう。村上 (2011) が指摘するような紙面の「余白」の多さも同じ文脈で理解できる。余白は自分で自由にできる空間であるものの、その扱いに当惑してしまうため処理できず、結果的に彩色の段階にあってもその余白を埋めることは出来ないのだと考えることができる。

また、石原 (2009) においては、遠近表現のできなさに関する指摘があった。遠近表現については飯田・中井 (1972) によれば、統一された主体の在り様として一点透視図法的に整合性をもつ空間構成が出来るか否か、つまりある1つの視点から、空間を客観的に対象として捉えられるかを検討するということが主体の成立の理解にとって重要であるとされている。要するに、主体が統一され、安定して初めて、遠近感を持った知覚が出来るということである。その意味では、遠近表現ができないということは自己の定まらなさでもあり、主体のなさであると言えるだろう。

さらに南野 (2007) については、描画の特徴に関して南野自身が述べているように、描画全体のつながりのなさがあり、各アイテムがバラバラに浮遊している様子というのは、クライアントが内的に体験しているであろう主体という、まとまった感覚の持ちにくさを反映しているのだと考えられる。

さて、多くの論文において「道」への言及が多いことは注目に値する。風景構成法における大景群と中景群をつなぐ役割の道は、社会と自分をつなぐものとされている。その「道」が発達障害児・者の風景構成法においては、どこもつながっていなかったり、蓋がされていたり、途中で途絶えているものなどが散見された。物と物との関わりを持たせるにはある程度の能動性、主体性が必要であることを考えると、上記の「道」の表現からは、発達障害を持つ人には、自ら「つなぐ」という感覚が希薄であると考えられる。あるいは、「道」が「つなぐ」という象徴性を帯びていることを鑑みると、過去と現在、現在と未来をつなぐ時間軸としての意味合いも有していると考えられる。その道がどこもつながっていないということは、発達障害児・者の、現在の自分という「定点」の感覚の弱さと、それゆえに時間軸上の過去や未来というつながりを感じにくいという特徴があるのではないかと推測される。

ただし、主体という、まとまった感覚は表現されにくいものの、心理療法を継続的に行って



いくと、描画の変化が見られると指摘されていた。それは、発達障害の人が「全く」主体を持たないというわけではなく、はっきりとはみえないもののある程度の主体は持った存在であると考えられるためである。上記のように、変化に言及する論があるということからは、発達障害児・者の主体はある程度の可塑性をもったものであると言えるのかもしれない。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、発達障害に関する風景構成法研究について概観してきた。数量研究においては、内田ら (2014) や長野 (2013) が高石 (1996) の構成型分類基準を基に、実際の臨床例に施行した風景構成法の構成型について比較検討していた。質的研究においては、心理療法プロセスにおいて実施された風景構成法から、そのクライアントの特徴を見出す試みがなされていたが、事例の個別性が強く、発達障害という大枠に共通するような視点についてはあまり明示されていなかった。そこで、河合 (2010)、河合・田中 (2013) が述べているような「主体・定点のなさ」という観点から事例の理解を試みた。多くの事例において、その観点から理解が可能な描画の特徴が見受けられた。

しかし、現時点ではそもそも発達障害に関する風景構成法研究は数量研究が少なく、事例研究が積み重ねられている段階である。これは風景構成法の数量研究自体の少なさと、発達障害という概念の広さとその個別性の高さがいまった結果であると考えられ、今後多くの実証研究がまたれる。「発達障害」の内的世界を理解するための研究が行われる際には、「道」に注目することが有用である可能性については上記で指摘したが、つながりのなさや主体のなさなどの問題となる部分だけではなく、部分的であれつながることのできる箇所や、独自に展開していく力、またそのストーリー性やそこに付随されるイメージの豊かさなど、発達障害児・者の力と考えられる点についても、着目していく必要があると思われる。

## 7. 引用文献

American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5<sup>th</sup> ed.)  
Washington, DC: American Psychiatric Association.

(高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)

Asperger, H. (1944). Die autistischen Pssychopathen in Kindesalter. Archiv für Psyshiatrie und  
Nervenkrankheiten, 117, 76-136.

(アスペルガー,H. (1996). 子どもの「自閉的精神病質」 フリス,U. (編) 富田真紀 (訳)  
自閉症とアスペルガー症候群 (pp.83-178) 東京書籍)

備瀬哲弘 (2009). 大人の発達障害——アスペルガー症候群,AD/HD,自閉症が楽になる本——  
マキノ出版

弘田洋二 (1986). 風景構成法の基礎研究——発達の様相を中心に—— 心理臨床学研究, 3  
(2), 58-70.

飯田真・中井久夫 (1972). 天才の精神病理—科学的創造の秘密 岩波現代文庫

池田豊應 (編) (1995). 臨床放映法入門 ナカニシヤ出版

石原みちる (2009). 諸機関での発達障害 15 汎汎性発達障害が疑われる大学生の進路選択への

- 支援—学生相談と大学教員の立場から 伊藤良子・角野義宏・大山泰宏編 (編) 京大心理臨床シリーズ7「発達障害」と心理臨床 (pp.333-340) 創元社
- 石金直美 (2013). 発達障害の世界の理解のために——描画・箱庭等の表現媒体を通じて—— 河合俊雄・田中康裕 (編) 大人の発達障害の見立てと心理療法 (pp.147-165) 創元社
- 河合俊雄 (2010). 発達障害への心理療法的アプローチ 創元社
- 河合俊雄・田中康裕 (2013). 大人の発達障害の見立てと心理療法 創元社
- 皆藤章 (1991). 風景構成法における風景の中の自己位置 心理臨床学研究, **8**(3), 66-74.
- 皆藤章 (1994). 風景構成法——その基礎と実践—— 誠信書房
- 鍛冶まどか (2011). 風景構成法を用いる目的について 臨床教育実践学研究センター紀要, **15**, 60-68.
- 神谷正光 (2011). 動かない箱庭を土台にして動いていった中学生男子との面接過程—集団への不適応と「発達障害」的な様相— 箱庭療法学研究, **24**(3), 53-67.
- Kanner, L. (1943). Autistic disturbances of affective contact, *Nervous Child*, **2**(3), 217-250.
- 前川美行 (2017). 自閉症スペクトラムのイメージ表現の変容—ランドマークの出現と「私」の生成— 箱庭療法学研究, **30** (1), 17-29.
- 松井華子 (2009). 風景構成法における彩色過程 皆藤章 (編) 風景構成法の臨床 現代のエスプリ, **505**, 120-128.
- 松井華子・千秋佳世・古川裕之 (2012). 風景構成法における彩色過程の基礎研究——彩色指標作成の試み—— 箱庭療法学研究, **25**(1), 103-110.
- 文部科学省 (2012). 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/\\_icsFiles/afieldfile](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afieldfile) ,  
/2012/12/10/1328729\_01.pdf (2019年8月26日)
- 南野美穂 (2007). ADHDを抱える思春期の少年との面接過程 心理臨床学研究, **25**(1), 25-36.
- 守屋英子 (2009). 諸機関での発達障害 9 スクールカウンセラーとして出会う中学生の発達障害 伊藤良子・角野義宏・大山泰宏 (編) 京大心理臨床シリーズ7「発達障害」と心理臨床 (pp.284-291) 創元社
- 村上義次 (2011). 投影描画法を通して見た発達障害児の内面の変化 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, **18**(2), 179-189.
- 長野真奈 (2013). 風景構成法に見る大人の発達障害の心的世界 河合俊雄・田中康裕 (編) 大人の発達障害の見立てと心理療法 (pp.166-183) 創元社.
- 中井久夫 (1996). 風景構成法 山中康裕 (編) 風景構成法とその後の発展 (pp.3-26) 岩崎学術出版社
- 小野次朗・上野一彦・藤田継道 (編) (2010). よくわかる発達障害[第2版]——LD・ADHD・高機能自閉症・アスペルガー症候群—— ミネルヴァ書房
- 佐々木玲仁 (2012). 風景構成法のしくみ：心理臨床の実践知をことばにする 創元社
- 杉山由利子 (2016). 高機能自閉症児とのプレイセラピー 自閉症児の「広大」な世界と“枠”の創造 箱庭療法学研究, **29**(2), 3-15.

文山：発達障害に関する描画研究の概観

高石恭子 (1996). 風景構成法における構成型の検討 山中康裕 (編) 風景構成法その後の発展 (pp.239-264) 岩崎学術出版社

内田裕之・明翫光宜・稲生慧・辻井正次 (2014). 自閉症スペクトラム障害の風景構成法の特徴 (1)：構成型の視点から 小児の精神と神経, **54**(1), 29-36.

Wing, L. (1996). *The Autistic Spectrum: A Guide for Parents and Professionals*. London: Robinson Publishing. (久保紘章 (訳) (1998). 自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック 東京書籍)

(臨床心理学コース 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2019 年 8 月 30 日, 改稿 2019 年 11 月 9 日, 受理 2019 年 12 月 13 日)

## 発達障害に関する描画研究の概観

—風景構成法に焦点をあてて—

文山 知紗

本稿は、発達障害に関する風景構成法を中心とした研究に焦点をあて、その内容について概観した。近年発達障害は増加傾向にあると言われており、症状や特性の理解だけでなく、当事者の内面や心の様相についての理解が必要不可欠であると思われる。周囲との関係の持ち方や自己の定位のさせ方などが問題となりやすい発達障害については、与えられたアイテムをどう定位させ、関係づけていき、全体を構成するかというプロセスを辿る風景構成法を見ていくことで、その内面を理解できる幅が広がると考えられる。本稿で取り上げた研究からは、部分的なつながりや豊かさはあるものの、全体としての構成のし辛さや遠近立体の表現の少なさという点が示唆された。また「道」への言及も多く、今後の研究で着目すべき点と考えられる。しかし風景構成法の研究自体が少ない中で、発達障害に焦点化した研究はさらに少ないため、今後の研究の進展に期待される分野でもあるだろう。

## Overview of Drawing Studies on Developmental Disorders : Focus on the Landscape Montage Technique

FUMIYAMA Chisa

This article presents research focused on the landscape montage technique related to developmental disorders, along with an outline of its contents. In recent years, the rates of developmental disorders have been increasing, and it is essential to understand not only the physical symptoms and characteristics but also the mental aspects of these disorders. Developmental disorders tend to be problematic, affecting the ability to have a relationship with one's surroundings and how to localize oneself. Using the landscape montage technique, which follows a process of localizing, relating, and composing a given item, it is believed that the mind's range of understanding will expand. In the research discussed in this paper, we suggest that although there is an abundance of partial connections, the overall composition is difficult and the representation of perspective solids is poor. In addition, there are many references to "Road," and this should be noted in future research. However, there have been few studies focusing on developmental disorders, and even fewer studies on the landscape montage technique, so this may become an area of active research in future.

キーワード：発達障害、風景構成法、主体性

Keywords: Developmental disorder, The Landscape Montage Technique, Subjectivity